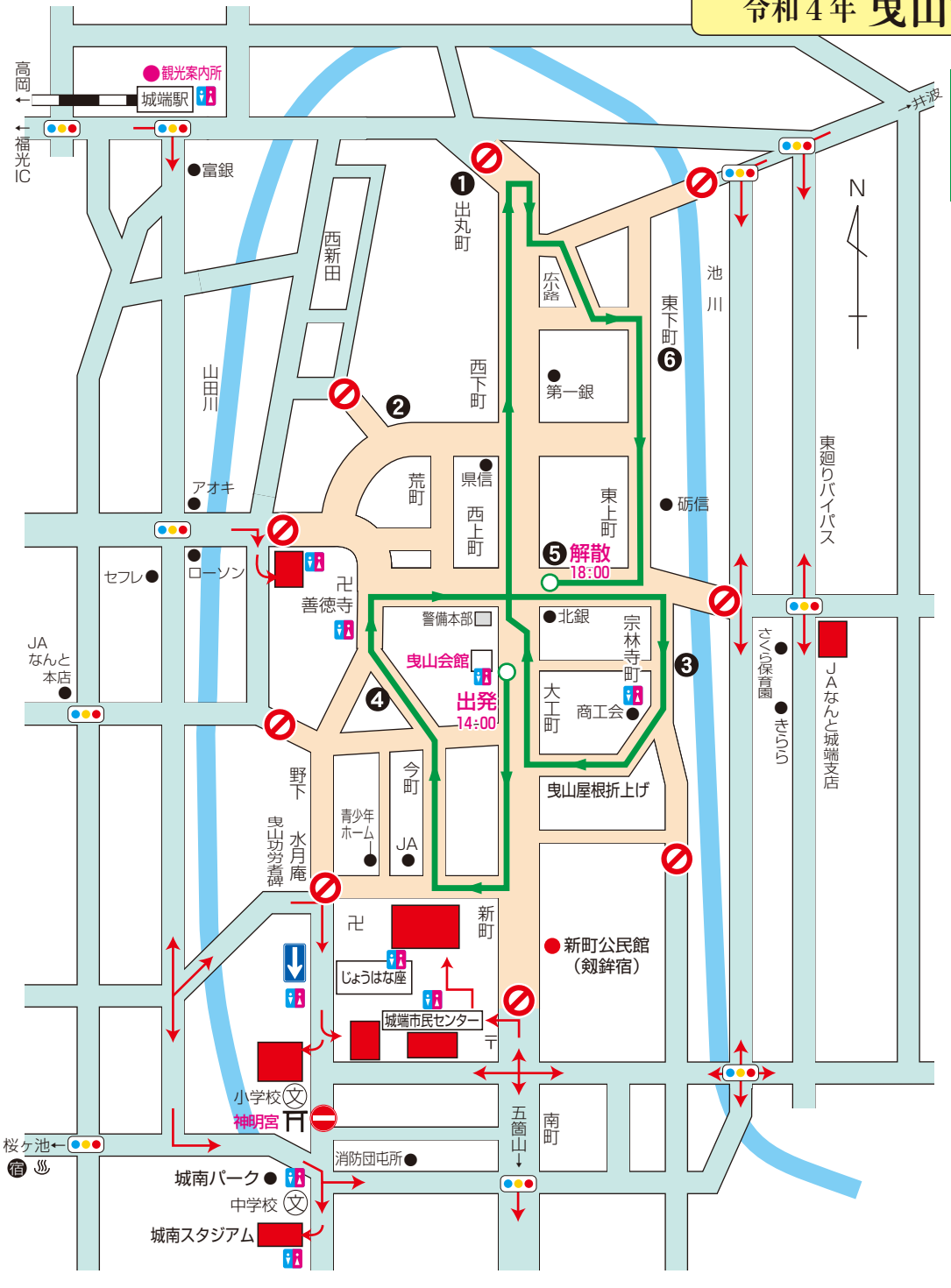
令和４年 曳山祭順路図



5月5日
8:30〜24:00まで
通行止

スケジュール

4日(水)（宵祭）

17:00〜21:00頃
飾り山宿

5日(木)

8:30〜
獅子舞・剱鉾・傘鉾・御輿の行列が氏子町内を巡行

13:50
曳山会館前にて出発式

14:00〜18:00頃
曳山会館前から庵屋台・曳山が町内を巡行

飾り山宿

❶	出丸町	出丸町内会（出丸町公民館）
❷	西下町	増山常雄（西下町公民館）
❸	東上町	東上町内会（岸　英治宅）
❹	大工町	大工町町内会（畑　時夫宅）
❺	西上町	西上町内会（恵比須会館）
❻	東下町	松平和人（東　町　庵）

庵屋台・曳山の動き
終日車両通行止
駐車場
車両の進行方向

優雅な庵屋台と華麗な曳山行列、桐の花咲く坂の町に紫の香りが流れる。

東上町

五月雨

松声会

五月雨に　池の真こもに　水増して
いずれがあやめ　かきつばた　さだかにそれと　吉原へ
程遠からぬ　水神の　離れ座敷の夕映えに
らょっとみかわす　富士筑波

〔解　説〕（江戸端唄系）明治二十四年（一八八七）に当時名人と称された清元お葉が作曲したもので、作詞は川田小一郎である。日本銀行総裁であった川田が愛人を連れて、向島水神の料亭「八百松」に遊んだ時、はからずももう一人の愛人と鉢合わせになり、とんだ鞘当てとなった。「富士筑波」はその意味で、「いずれが菖蒲かきつばた」も勿論、女性同士のことである。お葉はこの情景を見事に小唄としたので最後に「オクリ」が入っている。

西下町

宇治茶

諫鼓共和会

宇治は茶どころ　さまざまに　仲にうわさの　大吉山と
人の気に合う　水に合う　色も香もある　濡れた同志
粋な浮世に　野暮らしい　こらや　こらや　こらや
濃茶の　仲ぢゃもの

〔解　説〕（上方端唄系）元来は大阪で出来たものらしく、大阪屋吉兵衛の店で売り出した「大吉山」という銘茶の宣伝に使った曲とも思えるが、詳細は不明である。嘉永前後には江戸端唄となって流行したが、上方系のおっとりした味は失ってはいない。
古来、茶といえば宇治、宇治といえば茶の代名詞となっている。もともと薬用に使われたのが、次第に一般化され民間でも喫するようになったのである。

出丸町

夕暮

布袋同志会

〽夕ぐれに　ながめ見渡す　隅田川
月に風情の待乳山　帆上げた舟が見ゆるぞえ
アレ鳥が鳴く鳥の声　都に名所が　あるわいな

〔解　説〕（上方端唄系）端唄の代表曲として有名であるが、安政四年（一八五七）の「花哇一夕話」（歌次能六斉著）に、最初歌舞伎狂言「鏡山」岩藤の場の下座に使われた上方唄と記されている。
後に江戸端唄として洗練された曲調となり、殊に江戸とは関係の深い隅田川の風景なので流行した。元唄は「あれ鳥がなく鳥の名も、都といふ字があるわいな」であった。待乳山は隅田川の左岸にあって、古くは松山との由。

東下町

春惜む

宝楯会

更へ衣　峯にのこんの白雪や
鳴く音も老へて驚の　霞む麓の胡蝶でさへも
花のあと訪ふ　睦まじさ
ほんに名残の春じゃぞへ

〔解　説〕この曲は昭和六年、東下町の庵唄として出来たもので、庵唄の「秋草」の曲に新たに歌詞を付けた所謂替え唄です。歌詞にはふるさと城端を中心とした風景の、四月下旬から丁度お祭の行われる五月へかけての季節のうつろいと、過ぎてゆく春を惜しむ心が綴られています。

西上町

玉川

恵友会

玉川の　水にさらせし　雪の肌　積もる口説の
その中に　解けし　島田のもつれ髪
思い出さずに　忘れずに　また来る春を　待つぞえ

〔解　説〕幕末ごろに出来た唄といわれており、江戸庶民には必要な飲み水の供給源であった玉川（現・多摩川）が舞台となっています。江戸っ子は玉川の水を産湯に使うことが自慢で、殊に女性の色の白さは玉川のおかげだと誇りにしていたようで、そのことからもこの曲はとても親しまれた曲でありました。歌詞には江戸の女の恋が描かれていますが、はかない運命に身をおく哀しみと、心に深く秘めた恋を主題にしているので、しめやかですが非常に色気のある曲調となっています。

大工町

忍ぶ恋路

冠友会

忍ぶ恋路は　さてはかなさよ
今度逢うのが　命がけ　よごす涙の　白粉も
その顔かくす　無理な酒

〔解　説〕（上方端唄系）幕末ごろに江戸端唄として流行した、遊郭の女性を題材とした曲です。忍ぶ恋路というからにはただならぬ表立っては人に言えない関係なのでしょう。今後逢うのは文字通り「命がけ」…ただでは済まないこともわかっている、だけど逢いたくてその想いを巡らせるほど涙が溢れてきてしまう。紛らわす為に飲めないお酒にまで手を出して耐えてみても、どうしてもあの人へ想いを胸にしまっておくことが出来ない、死んでもいいから逢いたいと思ってしまう苦しみが痛いほど伝わる名曲です。

解説…「端唄の流れる里　桂書房」引用